

- ・相手が「察して」動いてくれることを無意識のうちに切望する →女王様
- ・「私が何を怒ってるのか、わからないのが腹が立つのよ！」 →読心術が要求される
- ・「好きにすればいいじゃない」——自分の思い通りにしたいときに出るひと言
- ・「この人に、一番に大切にされたい」という願いと、「私は一番じゃない」という悲しい思い →一番要求
- ・誰かが他人を褒めれば、「じゃあ、私はダメってことね」と感じる女性は意外に多い。
- ・劣等感に起因する「うっすら不機嫌」
- ・女性は、してくれなかったことより、察してくれなかったことが悲しい。
- ・女性が人間関係のトラブルや愚痴を語り始めたら、「そりゃあ、ひどいね」「きみは、正しい」「よくわかる、その気持ち」と共感のあいづちを打ちながら、ひとしきり話を聞いてあげるのがマナーなのである。
- ・共感する対話では、「で、結論は？」「で、何が言いたいのか？」「要するに」は言ってはいけない。
- ・(すれ違い実例) 私の事例で言えば、デート中のあま〜い雰囲気の中で、恋人に「私のどこが好き？」と聞いたとき、「きみといると楽だから」と答えられてがっかりしたことがある。
後に男女脳の研究をして、男性にとって「一緒にいて楽」な女性は稀有なので、かなり点数の高いことであり、結婚の決心にもつながる大切な要件であることを知ったのだが、若き日の私はそんなことは知っちゃいなかった。
- ・何度もあやまったことなのに、過去を蒸し返す——感情をキーに引きずり出される思い出は、脳にとっては毎回「今、起こったこと」のように臨場感たっぷりに展開されるので、新たな経験をしたのとはほとんど変わらない。つい、「あのとき、あなたは、ひどいことをした」と言わずにはいられないのである。
- ・人工知能開発) 突きつめれば、男性向けの対話エンジンと、女性向けの対話エンジンは別の設計をしなければならない。

女性は、何かをしてもらうとき、相手が「察して」動いてくれることを無意識のうちに切望する生き物なのである。

全部言わなくてもわかってくれる、あるいは、言ったこと以上のことをしてくれる。それが、女性にとっての「相手を大切に思ったときの自然な行為」だからだ。

こんなとき、そもそも察しの失敗をしている男性が、相手が何を怒っているのかの原因を追究しても無駄である。「何、怒ってるんだよ」なんて聞くのもNGだ。女性にしてみれば、「私が何を怒ってるのか、わからないのが腹が立つのよ！」なのだから。

そんなわけで、女性が「もう、いい。自分でする！」とキレたら、「そんなこと言わないで、やらせてよ」とにこやかに、さっさとやるべきことやろう。

「好きにすればいいじゃない」——自分の思い通りにしたいときに出るひと言

女性脳は、相手が自分の言いなりになってくれることで愛を測る脳である。このセリフが出るのは、相手を思い通りにコントロールしたいとき。

「好きにすればいいじゃない」と突き放せば、この国の優しい男性たちは、ほとんど好きにはできない。そのことがわかっていて言う脅し文句なのだ。

...

男性に対して、このセリフが頻出する女性は、残念ながら頭が悪い。理性が働かない自己中心タイプだ。伴侶にしたらかなり手を焼くので、覚悟したほうがいい。

背が高い女優を「いいね」と言った、働く女性の知人とビジネスワードで話したなどなど、男性は「ちっちゃくて、専業主婦のかわいい妻」へのアンチテーゼになるなんて露ほどにも思っていないので無邪気に発言するわけだが、傍らで、妻はぎらつくような気持ちになっていることも。

しかも、コンプレックスは、劣っているから持っているというものではない。ある程度イケている人が、もっとイケている人に対して持っていたりするものだから、当人でないと、コンプレックスのありどころは想像もつかないのである。

このため、「どうせ、私なんか」と言った彼女の、根本原因を追究してもたどり着けないし、わかったとしても、そこは痛い場所なので、あえて言及しないほうがいい。単純に、「どうだっていいわけ、ないじゃないか」と憤慨してあげてほしい。

このセリフの発端には、「この人に、一番に大切にされたい」という願いと、「**私は一番じゃない**」という**悲しい思い**がある。彼女を大切に思っていたら、そう思わせたことを悲しいと思ってほしい。

ちなみに、大切な女性の前で、ほかの女性をけっして褒めてはいけない。「あの人、きれいね（あの子、カワイイね）」と言われたときは、「そうかなあ」とはぐらかすのが正解だ。

右脳（感じる領域）と左脳（顕在意識）の連携頻度が高く、周囲の状況をしっかり把握している女性脳は、世の中の森羅万象がつねに自分に関わるような気がしている。

誰かが他人を褒めれば、「じゃあ、私はダメってことね」と感じる女性は意外に多い。

女性の強すぎる自意識に起因する「うっすら不機嫌」。男性にはなんの罪もないので、**その理由を探っても探し出せやしない**。劣等感に起因する「うっすら不機嫌」の場合は、原因がわかってもし触れないほうがいい。したがって、まずは、しばらくそっとしておいてあげよう。

女性は、してくれなかったことより、察してくれなかったことが悲しいのである。女子会では、「彼は〇〇してくれない」という愚痴より、「彼はわかってくれない」という愚痴のほうが圧倒的に多い。したがって、男性は、しなかったことをあやまる前に、気づかなかったことをあやまるのが極意。

「夫のムツとするひと言」

第1位は「誰のおかげで食えてるんだ」

第2位：「言ってくればよかったのに」

そう、それはまるで脳の中にパラボラアンテナがあるようなもの。大切に思うものに対しては、それが人であれ、仕事であれ、趣味であれ、信条であれ、つねにこの「意識のパラボラアンテナ」を向けていて、わずかな情報をもキャッチする。たとえ、目の前にいなくても。

この察する能力で、女性たちは家庭でも職場でも、大切に思うものを無意識のうちに守り抜いている。

だから、**女性たちは、ごくごく素直に、大切にする＝察することだ**と思い込んでいるのである。

「言ってくればよかったのに」「言ってくればいいのに」

は、言っ**て**はいけない。察することを放棄するこれらのことばは、女性を**ざらつくような気持ち**にさせる。この人は私の気持ちを察する気なんて、さらさらないのでわ、と、絶望させてしまうのだ。

「仕事と私、どちらが大事け?!」「友達の付き合いと私とのデート、どちらが大事なの」

は、寂しさのあまりにこぼれるセリフである。決して、仕事や友達がどうでもいいなんて思っているわけではない。

・・・

しかし、女性は、不思議なことに「どっち？」と聞きながら、その「どっち」を知りたいわけではないのである。

・・・

平あやまりしてほしいだけなのだ。

~~~~~

慰撫

なだめておだやかにすること。なぐさめいたわること。

~~~~~

女性にとって共感とは、戦いに勝つことより、問題解決より大切なこと。**共感欲求は、男性の想像をはるかに超えて強く、その好感度が高いのである。**共感さえしてもらえれば、ほっとしてストレスが減衰し、明日からもまた頑張れる。

・・・

女性が人間関係のトラブルや愚痴を語り始めたら、「そりゃあ、ひどいね」「きみは、正しい」「よくわかる、その気持ち」と共感のあいづちを打ちながら、ひとしきり話を聞いてあげるのがマナーなのである。

「女は、過去を蒸し返す」ことはご存じだと思う。

些細なことでキレて、今、目の前のことに直接関係するとも思えない過去のことまで引きずり出して文句を言う……男性脳からしたら、そう見えるかもしれない。

理由は簡単。**女性脳は、過去の関連記憶を一気に思い出す天才**なのだ。自分と子どもを危険から未然に守るために、過去の関連記憶を一気に引き出す仕組みを持っているのである。

女性脳の中では、一定の体験記憶が、その体験記憶を脳にしまったときの「心の動き（感情、情動、気分）」とともに格納されている。そして、ある「心の動き」が起こったときに、その「心の動き」をキーファクターにして、一気に関連記憶を引き出してくることができるのだ。

・・・

夫や上司が**何か無神**

経なことを言ったら、過去の**無神経な発言**をすべて一瞬で思い出すわけだから。

しかも、この方式で引き出された記憶は、**臨場感**たっぷりに「再体験」するかたちで**脳裏に展開**される。

共感する対話では、「で、結論は？」「で、何が言いたいの？」「要するに」は言ってはいけない。

私の事例で言えば、デート中のあま〜い雰囲気の中、恋人に「私のどこが好き？」と聞いたとき、「きみといると楽だから」と答えられてがっかりしたことがある。

後に男女脳の研究をして、男性にとって「一緒にいて楽」な女性は稀有なので、かなり点数の高いことであり、結婚の決心にもつながる大切な要件であることを知ったのだが、若き日の私はそんなことは知っちゃいなかった。

今となっては、そのときの自分が何を期待していたのか思い出せないが、たぶん「きみの声がたまらない」とか、「きみの笑顔が好きだ」とか、そういう感じの褒め言葉が欲しかったのだと思う。

女性は、理由もなく恋人に電話をかけて、**からんでみたくなる**ことがある。普通に電話している最中に、そんな気分になるときがある。発情している女性は、ときにとっても意地悪なのである。

何度もあやまったことなのに、過去を蒸し返す——感情をキーに引きずり出される思い出は、脳にとっては毎回「今、起こったこと」のように臨場感たっぷりに展開されるので、新たな経験をしたのとはほとんど変わらない。つい、「あのとき、あなたは、ひどいことをした」と言わずにはいられないのである。

女性の不機嫌の原因は、彼女たちから見た男性の思いやりのなさ、無神経な言動、口下手や気の利かなさなどがほとんどだ。しかし、それらは、あなた自身の人間性の問題ではなく、ほとんどが脳の認知能力の違いからくるもの。

だから、男性脳と女性脳の認知特性の違いがわかると、女性の不機嫌のわけも、それに対するそれぞれの処方箋も、ストンと腹に落ちてくるはずなのだ。

そして、「わがまま」「理不尽」ときに「不条理」とさえ感じる「彼女のさまざまな不機嫌の理由」の根底にあるのは、ただひとつ。「あなたのことが大好きで、大好きな**あなたから大切にされたい**」という思いだけ、ということに気づくだろう。男性には、ぜひこのことを知っておいてもらいたい。

同じ言語でコミュニケーションをとっている男女は、基本的に自分の気持ちは相手に通じている……と信じている。「でもこれ、もしかすると、ちゃんと通じていないんじゃないの？」と、私が気づいたのは、大学卒業後に勤めたコンピュータ・メーカーでの研究中のことだ。

当時、配属された開発プロジェクトのミッションは、ヒトと人工知能との対話の研究。人間の意図を察して、人に寄り添うように動く人工知能には、まず人間のことばを理解してもらわなくてはならない。人は対話でどのように満たされていくのかを解析する中で、男性と女性では、満たされる対話、すなわち好みの対話のスタイルが違うことがわかってきたのだ。

気持ちいいと感じることばの種類が違うし、察してほしいことも違う。そもそも対話の目的自体が大きく違っているのである。

突きつめれば、男性向けの対話エンジンと、女性向けの対話エンジンは別の設計をしなければならない。そうでなければ、人工知能は人間と幸せに共棲できないという結論に達し、これは大変なことだと気づいたのである。

たしかに、夫はこの世で一番ムカつかせる男。しかし、彼に対する憧れは、結婚して30年経っても、私の中にしっかり残っている。私にはない感性を持つ、謎の男だから、なんだろうなあ。

恋をしたのは「違っている」からなのに、それに気づかず、カップルになってしばらくは「違っている」ことに傷ついていた。結婚生活30年を越えて、今は「違っている」ことが面白い。

男女の仲は、一筋縄ではいかないから素敵だと思う。だから、誰もが通る、「違っている」ことに傷ついている段階のすべてのカップルに、この本を読んでもらいたい。20年ほどうまく機嫌をなおしておけば、違いを楽しめる男女になれるのだから。不機嫌の取り扱い失敗で別れるなんて、もったいなさすぎる。

恋に落ち、愛し合うようになってからも、男女の気持ちはすれ違う。愛し方もその表現も、男性脳と女性脳では大きく違っている。この違いのせいでできた小さなひび割れ

が、気づかぬうちに、修復不可能な大きなミゾとなることもある。

まず、女性の愛は「察してなんぼ」だ。なぜなら「共感」を心のよりどころとする女性脳は、愛しいと思う相手に対しても、「言われる前から」「察して」「思いやり」で行動する。それが女性にとっての「愛の表現」なのだ。

このことを理解していれば、「言ってくれればやったのに」「ちゃんと言えればいいのに」が NG ワードであることは、容易に想像がつくだろう。

つまり、大好きな男性から「きみの望んでいることは、言ってくれなければわからない」と言われたら、それは、すなわち「察すること＝愛すること」を最初から放棄していることと同義。察してもらえない女性は、「愛されていない」と受けとり、傷ついてしまうのだ。

また、これも男性脳には理解しづらいことなのだが、女性脳の情緒は、時間軸に沿ってゆったりと蓄積されていく。さらに、蓄積するためのプラスの容れものと、マイナスの容れものを別々に持っている

・・・

だが、情緒を時間軸に沿ってためていく女性脳は、マイナスの感情でも同じことをする。ためてためて、ある日、我慢の限界を超えたら一気に溢れ出す。そして、いったん溢れたら、もう取り返しがつかない。

男性脳と決定的に違うのは、容れものが別々なので、いくら楽しいプラスの時間を積み上げてもマイナスの時間を相殺できないところにある。